かささぎ通信 第162号

毎月第2金曜日 13：30～15：30　　2026年 9月 11日 発行
刈谷市中央図書館研修室　参加自由　　森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

２０２６年７月の「森三郎の作品を読む会」では、「ひとりはノッポでひとりはチビ」（『少年少女』一―一〇、１９４８年１２月）／「新葛の葉ものがたり」（『幼年童話集　帽子に化けたクロネコ』東京一陽社、１９４９年２月）を読みました。

「ひとりはノッポでひとりはチビ」は、同郷の幼馴染のノッポ（チューインガム博士）とチビ（プリン博士）の話です。二人とも独身で、隣り合った家に住み、一日おきに互いの家に行き来する仲良しでした。話の展開は、一読しただけでは分かりにくく、作者は読者の困惑ぶりを楽しんでいるのだろうと思えます。

読み返してみて、この世界と全く同じ構成の別の世界があるという話だと分かりました。これはプリン博士の家での出来事で、プリン博士の右の耳がかゆいのでチューインガム博士にのぞいてもらうと、不思議なことに大きくなった耳の穴に、チューインガム博士が小さくなって吸い込まれてしまいます。行きついた先にはさっきまで住んでいたのと同じ世界が広がっています。元の世界から来たチューインガム博士は、別の世界のプリン博士の家で、今自分が体験したことと同じことが展開されるのを目撃します。でも別の世界のプリン博士の右の耳に吸い込まれた別の世界のチューインガム博士はちゃんと戻ってきて、吸い込まれた先にここと同じ世界があることをプリン博士に話します。勿論そこは、今覗いているチューインガム博士のいた元の世界です。別の世界のチューインガム博士は、（元の世界の）自分の家の古井戸に気づいてその中に飛び込んだところ、こうして戻ってきたと説明しています。一体だれが本当の自分なのか分からなくなった初めのチューインガム博士は、自分も古井戸を探して飛び込み、元の世界に戻ることができました。井戸が二つの世界の通い路になっていたと分かります。

ここまで理解してみると、『赤い鳥』１９３３年3月号の辻乙四郎の名前で掲載された童話「猿酒」が、思い起こされます。猿が作ったお酒を飲んでしまい、もう二度と人間の世界に帰れないと思っていたおじいさんが、古井戸をのぞいておばあさんのいる世界を探すことができました。ここでも人間の世界へ通じる入り口が井戸だったのです。もっとも、これは夢の話でしたが。「ひとりはノッポでひとりはチビ」でも、登場人物がみんな互いの耳の穴の中に吸い込まれてだれもいなくなったところで話はおしまいです。

『幼年童話集　帽子に化けたクロネコ』所収の「新葛の葉ものがたり」は小松之介という若殿が人間に化身した蝶々の娘と結婚する話です。「葛の葉物語」は、信太森の白狐が葛の葉という美女に化けて京の陰陽師安倍保名とちぎり、一子晴明をもうけたという伝説ですが、そこに「新」をつけたのは異類婚姻譚という共通点を示しています。婚姻後、小松之介は奥方の胡蝶御前を残して戦に出ます。やがて家来たちは皆死んでしまい、自分は六部になって諸国を修行して回っているという手紙が届きます。泣いている胡蝶御前の前に春の女神・佐保姫が現れ、菜の花衣を着せると、御前は蝶になって消えていきました。最後に胡蝶御前は「今はとて菜の花衣着るおりぞ君をあわれとおもいいでぬる」という歌を、障子に書き残しておきました。年を取って戻ってきた六部は、『竹取物語』のかぐや姫が天に戻る時の歌をもじったその歌を見て、すべてを悟ります。

六部の姿で全国を行脚に出る話は「かささぎ物語」（『赤い鳥』1931.12）にありました。他にも『赤い鳥』にかつて掲載された三郎の作品を思い起こすような表現が所々に見られます。

戦後三年頃の作品には、これまでの作品を振り返り、新しい作風を模索しているような感じがあります。

〈次回予定〉２０２６年10月９日（金）午後一時半～三時半、
刈谷市中央図書館2階研修室
「カエルのへそ」「春告げ鳥」（『幼年童話集　帽子に化けたクロネコ』東京一陽社、１９４９年2月）